

理學博士 山 本 一 清 主 幹

天 界

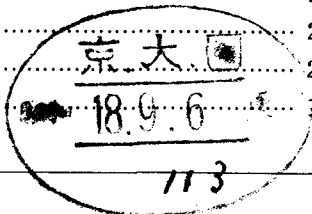
(第 23 卷)

第 2 6 6 號

昭和18年 第 8 號

本 號 要 目

口 繪：鱸座新星の初期の光度曲線	山 本 一 清 ③
卷頭隨筆：報告せざる觀測は價值乏し，等々	山 本 一 清 241
瀧山氏の鱸座新星發見事情	243
日蝕觀測を終つて(3,完)	木 邊 成 麿 245
月蝕の豫報計算(2)	熊 切 一 男 251
七夕星を詠める	253
田上天文臺通信	260
星象美隨感	野 尻 抱 影 261
古き曆の跡を尋ねて(本邦天文曆學史覺書 1)	渡 邊 敏 夫 263
小遊星課を創設する	本 會 觀 測 部 266
精密な星座早見表の作り方	山 本 一 清 267
標準天文用語表(18)	274
觀測部月報：流星，掩蔽，彗星，太陽	276
編輯室より	280
録附：天界第22卷索引	1-4



ウ
ロ
キ
ル
?

本部：田上天文臺 東亞天文協會 事務局：滋賀縣堅田

會員に關する報告 (18. 6. 30 締切)

- 【入會】 ×下田 靖雄(朝鮮) 爲崎 信彦(神戸) 廣田一郎(宇都宮)
 市岡中學天文班(大阪) 永田 武信(神戸) 淺井景樹(名古屋)
 吳月樵(中華民國) 高橋 信彦(京城) 村田 宏一(石川) 松坂 一見(石川)
 塚田三四子(鹽釜) 戸田 卓(清水) 山田道夫(和歌山) 影山 一期(東京)
 山本 正二(大阪) 奥田 毅(大阪) 玉置進一(和歌山) 笹井 武彦(豐中)
 大達 安夫(東京) 北島 憲之(京都) 住友 蒸治(徳島) ×西條 八束(松本)
 犬伏 功(徳島) ×中島 初一(佐賀) 楠田 治雄(大阪) 安達 延(東京)
 山田 壽子(東京) 池間 昌紀(臺中) 戸田 文夫(大阪) ×近末 允實(清水)
 五高報國團天文部(熊本) ×高橋昭吉(宇都宮) 安田 孝(大阪)
 ×安田 秋郎(滋賀) 佐藤 初男(大阪) 黒田 榮次(徳山) 黒木 敏夫(東京)
 ×阿部 三雄(東京) 橋本 英夫(明石) ×伊藤高明(名古屋) ×川田 秀幸(高松)
 川上 節也(東京) 森岡 孝雄(岐阜) ×中村 貞子(東京) 井上 惠一(千葉)
 ×葦科 睦(東京) 矢野 寛(姫路)
 【觀測部入部】 重藤 和男(東京) 大谷 豊和(市川) 發生川昭一(宇都宮)
 吉浦 要(横濱) (×印は觀測部入部を兼ね)

【逝去】 渡邊精吉郎(東京, 地方委員)

意 注: 御移轉の節には直ちに(前住所をも並記して)御通知下さい。觀測部の方は其旨附記して下さい。(東亞天文協會事務局)

會長	山本 一清	清水 眞一
副會長	木邊 成麿	觀測部長 木邊 成麿
理事	宮森 作造	經理部長 宇野 良雄
事務理事	中村 覺	理事(無任所) 美田 爲三
教育部長	高城 武夫	
報導部長	山本 一清	

本部所在地 田上天文臺(滋賀縣栗太郡上田上村)内
 事務局所在地 滋賀縣堅田局區内
 經營する天文臺 倉敷天文臺(岡山縣倉敷市), 寶道光觀測所(廣島縣沼隈郡瀬戸村)
 大阪支部所在地 大阪市立電氣科學館プラネタリウム内 (大阪市四ツ橋)
 臺灣支部所在地 臺北市公會堂内

- 觀測部
1. 流星課 (課長 和歌山縣有田郡金屋 小樵孝二郎, 幹事 宇野良雄)
 2. 彗星課 (課長 滋賀縣草津町大路井420 山本 進)
 3. 小遊星課 (課長 山本一清)
 4. 變星課 (課長 木邊成麿, 幹事 小澤喜一)
 5. 太陽課 (課長 缺, 幹事 靜岡縣志太郡吉永村吉永1768 大石辰次)
 6. 黃道光課 (課長 田上天文臺 山本一清, 幹事 倉敷天文臺 本田實)
 7. 豫報課 (課長 山本一清, 幹事 神田壹雄)
 8. 橋樑課 (課長 滋賀縣野洲郡中里村 木邊成麿)
 9. 寫眞課 (課長 大津市鹿關町 堀井政三)
 10. 遊星面課 (課長 伊達英太郎, 幹事 佐伯恒夫, 木邊成麿)
 - 火星班 (班長 兵庫縣川邊郡雲雀丘 伊達英太郎)
 - 木星土星班 (班長 大阪市四ツ橋 電氣科學館 佐伯恒夫)
 - 水星金星班 (班長 木邊成麿)
 11. 掩蔽課 (課長 兵庫縣武庫郡住吉村字大藏1417 高城武夫)
 12. 月函課 (課長 伊達英太郎)
 13. 歷史研究課 (課長 兵庫縣武庫郡本山村岡本高石344 井本 進)

1943年

九月の天象

Himmelserscheinungen im September, 1943.

太陽は今月の初め獅子座にあるが、中頃から乙女座に入る。8日は“白露”の節、又、24日は“秋分”即ち“秋の晝夜平分”の日である。これ以後、太陽は南半球に去る。2日は“二百十日”即ち立春から數へて210日目に當る。天候激變の日として之を曆面に記載し始めたのは、保井春海の貞享曆からであると俗間には傳へられてゐるが、井本氏の研究によれば、既に明曆2年(學紀1656年)の伊勢曆には載せられてあるから、これの發明者は春海でないことは確かである。

月は前月末に新月であつたので、今月に入つて、7日が上弦、14日が満月、21日が下弦、29日が新月である。又、13日には近地點、25日には遠地點を通過する。14日の満月は所謂“仲秋の名月”で、昔から文人雅客の待望するものである。9日23時頃には射手36番星を掩蔽する。

水星は前月末以來宵の星であるが、離角は漸次減少しつつあり、又、地平に對する黃道の傾きも小さいので、觀望は殆んど不可能である。25日に内合し、それからは曉の星となる。

金星は年初以來永らく宵の明星として輝いてゐたが、此の5日には内合となり、太陽の南 8° の邊を通過して、曉の星に移る。この月の初旬中、晝間の觀測によつて細い位相の變化を見るのも興味があらう。この星の大氣が多い結果、南北の兩尖頭は 180° を越えて、殆んど全圓周に見えるかも知れないから。

火星は夜半以後の東天に可なり高く、光輝も0等級に、視直徑も $10''$ に達するから、専門家はそろそろ表面觀察を始める頃である。3日には天王星の南 1° の點を通過する。(年鑑參照)。

木星は日出前に低く東天から現れるが、未だ觀測には少々早い。

土星は夜半以後に望遠鏡で觀測に適するが、一般人には親しみ難い位置である。

天王星は牛座エプ星の北 2° の場所で、中旬の頃に停留し、それから逆行に移る。年鑑の圖をたよりとして觀察することが出来る。光度6等、視直徑 $3.5''$

海王星は秋分點の北 1° あたりを順行中であるが、太陽と會合する時期なので觀望は全く不可能である。

冥王星も太陽の輝きに妨げられて、觀望時期ではない。

流星は、毎年例によれば、著しい現象を見せない。

黃道光 は曉天に立派なものが見え始める。特に黃道帶の觀測は目下最も重要な時期である。太陽黑點との關連に於いて、其の形狀、位置、光輝等を嚴密に觀察されたし。

天界 第266號

昭和十八年8月22日印刷
昭和十八年8月25日發行〔定價(税)金40錢〕合計金43錢
〔特別行爲稅相當額3錢〕送料金1錢

編輯兼發行所) 滋賀縣滋賀郡真野村大字真野513

東亞天文協會(振替大阪56765)
(代表者山本一浩)
日本出版文化協會第2種會員(第220038番)

印刷所) 京都市上京區上樺木町千本東入

眞美印刷所 橋本岩太郎〔電西陣3702〕

配給元 京都市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社